

第六章 目撃者たち

マニラからはるか北方の高原地帯は、険しい山に被われた涼しい静かな村々で、戦争とは遠く離れた別世界だった。ルソンの平野部を出てポンコツバスで登山をし、曲がりくねった穴ぼこだらけの道でサンタフェを目指し、三千フィートのカラボロ山に入っていくと、バスコ湾のスペインバスコ人の国の後にニエバ・ビスカヤと名付けられた地域がみえてくる。

最初の山脈を越えると、バヨンボンの町を取り囲む肥沃なカガヤン渓谷に下りてゆくことになる。カガヤンは火山噴火口のようにあちこちに井戸が点在し、少年が水牛をあやつり湿地を耕す米作地域だった。西へ向かうとコルディラ山脈（セントラル山脈）、東はより高所のシエラマドレ山脈に囲まれる。そこは褌だけを身につけた山岳族しか住まない熱帯雨林で覆われている。カガヤン渓谷の



バヨンボンから北に向かうとルソンの北端、沿岸の町アパリへ下りていくように広がり、カミギン島と呼ばれる一大オアシユア島へつながっている。このバヨンボンの静かな高台の周りが一九四二年（昭・十七）〜四五年（昭・二〇）、重要なゴードレンリリーの基地に

なった。というのも、この地域には自然による洞窟がたくさんあったからだ。石器時代の道具や木炭画を持つ者もいた。地盤は強固ではあったが、上の地層の砂、石炭、沈殿物は急流や地下水によって洗い流され天然の穴や地下金庫を作っていた。この表面は簡単に掘れるものが多く支柱もいかなかった。日本軍は軍事的な目的と財宝の保管のための要求に最適だと認

識した。

カガヤンからフォルサモまで飛行機なら簡単だ。もちろん日本へは沖縄で給油すれば簡単だ。一九二〇年代と同じで、早くから日本の戦略家達はフィリピンを手中にし、日本帝国の中へ吸収する計画をたてていた。それから、一九二〇年代の初め、若干名の日本人がルソンに開拓者、実業家、地質学者として接触を始め、日本の漁船は沿岸にますます数を増やし

ながら出現するようになった。連中は偵察兵や情報員達であった。彼らは南シナ海沿岸付近、バヨンボン、バギオ、アパリを開拓し、そしてタガログ語やイロカノ語を学び、そして誰が成功し、影響力があるかをノートに書き込み、地域のインフラ、道路、公共施設の詳細を収集した。

港を海図に書き込み沿岸線の地図を作った。農民の助けをかり、洞窟をみつけては調査をした。当時のバヨンバンには二千人も満たない住民しかいなかった。農民は一キロから二キロで区分けされている居住区が村に密集して住んでいた。バヨンバン郊外の小さな居住区のひとつにデュラオと呼ばれる所がある。その酋長はソノ・バルモアといい、顔立ちがよく素直で無邪気な十代の甥ベンと一緒に水田で働いていた。ベンは両親がまだマニラの北、湿ったパンガシナン平野に住んでいた一九二五年の三月に生まれた。父はそこで日雇い労働者として仕事をしていた。

ベンの子供時代のほとんどをデュラオの伯父の家で過ごし、バヨンバンのカソリック教会へ通った。彼はそこで六年生まで在籍し、読み書き、そしていくらかの英語を「デイズニーの父さん」から教わった。暇な時間は祖父とともに精米をし、春には鳴きながら働く水牛の後ろで畦作りをし、秋には鎌で稲を刈り取っていた。フィリピン人のほとんどはタガログ語を話していたが、イルカノは孤立していたので、ルソン島北岸の乾燥したイルコス地方の方言で話していた。バヨンボンやバギオ避暑地、特にマニラにはノロカノの地域があり、自らの政治組織と地下組織をもっていた。日本軍がフィリピンに侵攻したときベンは十七歳になったところだった。当時、彼の両親はパンガシナンにいたのだが、そこは侵入者の丁度通り道

だった。彼の父エステバンはアメリカ軍の新兵時代に射撃事故で片目を失っていた。ほとんどの人は右利きだから、ライフルの使い尽くしたカートリッジは目から離れる右側にはずすように作られている。初めて射撃場に立ったエステバンは左利きなので左肩にライフルを置きそれを撃った。カートリッジは彼の目に直接あたり彼は目を失った。アメリカ軍が占領され、彼は数千名の連合捕虜の収容所へ行くことになった。

アメリカ人と違ってフィリピン旅団はしばらく尋問を受け帰宅を許された。エステバンが留守の間にパンガシナンの家々は略奪者に燃やされ、彼の家族は無事にデユラオにたどり着けるよう山中へ逃げ込んだ。最年少だったベンは先頭を歩き、母、祖母、兄、妹と続いた。難民と同じで彼らは家財道具を運んでいた。金もないので、数週間も発酵した魚の練り物と米だけを食べていた。日本兵がどこにでもいたので、ベンは多くの質問に答えなければならなかった。

多くのフィリピン人が兵隊達に奴隷のように残酷に打たれながら働かされるのを見ていたので大変に怖かった。

二月の半ばごろ、彼らはサン・ジョーンズに到着した。日本の駐屯地を通過するのに四日も要したのだ。デユラオに着いたのは真夜中だったが、安堵と幸福感でいっぱいだった。ベンの祖父リノは即座に豚を殺し料理を作った。そして大きな声で「さあ子供達、どんどんお食べ、お腹いっぱいになるまでな！」

数日後、ベンの父が解放され、彼らと合流した。抱き合って喜びあった。

祖父のリノはベンの父にデユラオの農地を与え、戦争中を通じて家族の面倒をみる事ができた。十カ月後の一九四三年一月、彼らは自家用の砂糖やラム酒、飴玉を作るためにサトウキビを刈っていた。ベンは空き缶を火にかけて調理するために枯れた笹を切り出しに行こうと話した。彼は二頭の牛が引く車を連れて大きな笹の自生する近くの丘に上っていった。彼がナタで缶を切り刻んでいると、木の葉のざわめきが聞こえ、日本兵が回りを取り囲んでいたのに驚きおびえた。彼らはヘルメットを笹で偽装し、ベン

に銃を向けていた。彼は恐怖で固まり即座に殺されるものと思った。兵士は銃を彼に押し付け、ベンはナタを捨てて荷車の後ろにうずくまった。将校の足立大佐はベンに対し、まずタガログ語で話しかけ、次にイルカノ語にかえた。

「ここで何をしてるんだ。」

「薪を切つとるんだがね。」

「サン・アントニオ地区への道はどこだ？」ベンは指さした。足立はベンにそこまで案内するように命令した。ベンは父の許しがないと行く訳にはいかないと言った。その時点で、ベンは彼らの指導者の言葉を聞いていない。白い服で刈り込まれた頭の若い男がベンに対して親しげに微笑んだ。二十代の半ばにしかみえないとベンは思った。ところがその集団の中で彼は足立大佐や他の将校達から格別の扱いを受けていた。彼は木と革で作った鞘に入った大きな日本刀を持ち、反対側には短剣を身に付けていた。

上着の左胸ポケットには金縁で五、六インチの十字形の模様が入った赤い標章が輝いていた。足立大佐は彼に対してうやうやしくキムスと呼んでいた。彼らがデユラオのバルモア家に戻ってくると父は彼を仕事にもどそうとした。しかし祖父はベンにとってサン・アントニオへ案内することのほう賢明だろうと言った。

サン・アントニオへの道中、将校は彼といっしょに水牛の運搬車に乗っていた。ベンは殺されると確信していた。涙が頬をつたった。大佐がどうしたのかと聞いた。大佐はベンにやさしく微笑み、恐ろしくはないよと語った。彼らはベンを傷つけたりはしないだろう。一行が椰子の木の前で止まると、ベンは素早く駆け上りいくつかの椰子の実をとり斧で開いてやった。彼らはベンに名前を尋ねた。彼は「ベン・ハー・ミーン」だと、タガログ語とイロカノ語で伝えた。

キムスは日本語で何やら話し、足立はベンに、もはやサン・アントニオへ行く気はなく、メインキャンプのある反対方向のサン・フェルナンドへ引き返したいと言った。ベンは再び父の許しを得なければならぬと答えた。

このことがキムスに感銘を与えたようで、再び彼らはベンの家にもどった。父は今度も抗議したが、日本軍はもう一週間だけベンを借りたいと申し出た。彼らはベんにバナナの葉で外出用の衣服を包み持つてくるように言った。サン・フェルナンドへ向かう途中、1.5kmぐらい離れた森の中で女性の悲鳴が聞こえた。キムスとベンは荷車から飛び降り、何事か調べるため走った。一人の日本兵が村の娘の服を剥ぎ取り強姦しようとしていた。キムスは刀を抜き、二人の兵士を刃の横でピシッとたたいた。男達はしゃがみ込み顔を土にすりつけ助けを求めた。キムスは叱りつけた。彼らは直立不動で聞き震えていた。

将校達は「ハイ」としか言わない。キムスは二人を逮捕させた。キムスは自分の上着を娘に与え家まで送るように部下に命じた。

後日、サン・フェルナンドのキャンプに集団が到着した時、彼らが入口に入るとともに日本人全員がお辞儀するにはビックリした。足立大佐はキャンプの全員をよびよせた。キムスは二人の強姦犯に厳しい処罰を加え、決してフィリピン人とセックスしてはならない、もしすれば死罪にすると命じた。キャンプ中の誰もが呆然となった。大佐は正に「キムス」と言った。キムスは大きな将校の一団と鉱山技師、地理学者、物理学者、建築家、科学者、陶器専門家、電気、爆薬などの数百人の男達と一大隊の兵士を従えていた。サン・フェルナンドには千人をはるかにこえる人間がいたが、その仕事は唯、略奪品の運搬と隠匿だけであった。

ベンは金属製の数千の箱と木製の箱を見た。それはとても重たそうだった。箱を運ぶ時、四五名あるいは八人がかりで、革で編んだような帯を使っていた。ある時、ベンは真つ裸の朝鮮人、中国人、フィリピンの奴隷労働者数百人が目隠しをして箱を動かしているのを見た。彼らは足首に鎖がまかれ、手首は、つるはしやシャベルを使うことができる程度にロープでつながれていた。ベンには彼らが奴隷であることがわかった。重い荷物を積んだトラックがひっきりなしにサン・フェルナンドキャンプに到着し、荷を降ろすとトラックの男達はどこかへ行ってしまった。キムスの兵

隊と労働者達は、その箱を地道や深い穴あるいはカバヤン溪谷に点在する洞窟へ運んだ。ベンはフィリピン人がトラックの箱を持つてきて道路の横に積み上げるのを見たことがあった。フィリピン人が行ってしまうと、日本兵は箱を洞穴の中へ運んだ。兵士達は離れるように命じられ、中国人労働者がそれを深い洞窟の中で積み上げ土で覆い、その地域特有の平らな石炭や成長の早いパイヤの木、笹の葉などで偽装した。いくつかの坑道をベンは案内され見ているが、キムスの技術者達によって広げられた大きな洞窟もあった。最初、何が行われているのかベンには全くわからなかった。暴力沙汰もほとんど見ていないから日本人との生活は怖くないというよりむしろ不気味であった。

ベンはキムスの水汲み、食事、召使、付き人になり、食事をもつてきたり靴を磨いたり洗濯したり、キムスの洋服に気をつかい、清潔さを保つことを覚えていった。キムスはキャンプの中でテントではなく真ん中の立派な家に住んでいた。サン・フェルナンド地域のフィリピン人住民はすべて追い出されていた。キムスの家には大きなベッドの寝室があり、東南アジアのどこかで略奪してきたであろう真鍮製の足で支えられた堂々たるタイ製のテーブルがあった。ベンはあるものをみて、それは瓶でありキムスがそれで顔を洗うのだらうと思った。ところがそれは単に飾りであつて、うつとりとながめるものだったのだ。

夜になると枕をベッドの真ん中におき、ベんに床ではなくて片側で寝るよつに命じた。キムスは反対側で眠った。ベんに決して枕に触れぬように警告し、仮に、もしそうしたら爪のどを欠き切るぞと言った。最初は全く動けないので落ち着かない夜を過ごしたベんだつたが、後にはなれてしまった。

ベンは十八歳のハンサムな男だったが、キムスは三十歳、洗練されていてむしろベンより若くみえるほどであった。日本人の貴族達にとつて彼に対して同性愛の味を感じることは異常なことではなかったであらう。その可能性を排除できないし、ベんとご主人様との間に性的な関係があつたかど

うかいかなる証拠もでてはいない。

日本の貴族社会において身近に私的な召使を寝させ、命ぜられれば何でも答えるのは普通のことだった。

キムスはベンの無邪気さ誠実さそして両親、兄弟への愛情を認め格別に彼を好んでいた。数千の兵士達の真ん中にいて、多くの奴隷達をそばにおいていながらキムスは完全にひとりぼっちだった。

ほとんどの農奴は彼の顔を見上げただけで眼がつぶされると恐れていた。そんな完全なる孤独の中で彼はベンの存在を弟の様に思い、その性格のよさを喜んでいた。キムスも足立大佐も他の日本人から彼を守り、ルソンの他の地域やフィリピンの別の島へも連れて行き丁寧な扱った。

ベンが言うには、多くの将校や兵士はフィリピン人を、又特に連合軍捕虜に対しては怒るように、そして残酷にふるまったそうである。

しかしキムスには暴力を避けた。ベンは言った。「キムスはいつも僕に自分の食べ物をくれたよ、チキン、豚肉、牛肉、缶詰の鰯とかね。」

キムスの作法は優雅だし、紳士的だった。彼の話し方はやさしく、じつくり話を聞いてくれた。

まわりに誰もいない時はベんに英語で喋った。ある時、一匹狼のフィリピン人ゲリラが捕まりサン・フェルナンドのキャンプに引つ張られてきた。

キムスの側近である川端旅団長と鍋木大佐は銃殺するつもりだったが、キムスが解放してしまった。ゲリラは頭のでっぺんから悲鳴をあげて逃げ去った。きつと後ろから銃撃されるのが恐ろしかったのだろう。日本軍全員がそのこっけいな姿を見て笑っていた。

一ヶ月が過ぎた頃、ベンは勇気をだして足立大佐に、何故キムスはこの人と違っているのですかと尋ねた。足立はいとも簡単に答えた。「彼は殿下下からな。」キムスがこのやりとりを聞き別の部屋から入ってきた。微笑みながら、彼は人差し指を二つ合わせて英語で話した。「裕仁と私はそういう人間だよ。」

ベンは聞く、「それじゃあ裕仁天皇の弟なの?」、キムスは答えた。「いや、

それは秩父だ。私は従兄弟だよ。」

プライベートな会話の後でキムスはベんに秘密の名前は竹田宮であると話した。しかし戦争中は暗号名、キムス・村越を使った。

彼はベんにこの事や他のいろいろな事情を喋らないように誓せた。

竹田恒徳（ツネヨシ）（これがフルネームだ）皇子は明治大帝の孫だ。（1852-1912）明治天皇は側室に四人の娘があり、それぞれが四人の皇子に嫁いだ。その四人の皇子は異質な性格で生涯の悪友だった。

北白河宮成久、弟の竹田宮恒久、そして朝香宮鳩彦、義弟の東久邇宮稔彦である。この血族の殿下達は少年期に同じ学校に集まり、同じ大学へ進学し軍隊も一緒、同じ芸者を共有し一緒に渡欧、そして同じようにプレイボーイだった。

二人の皇子は若くして死んだ。竹田宮の唯一の皇子が十歳のとき死亡。そしてその弟の北白河宮成久は、一九二三年、手作りの高級車ブガッティでパリからドゥービルへ旅行中、道路わきのプラタナスの木に激突し、病院で死亡した。だからこそ、残った遊び人朝香と東久邇は大きくなった若い竹田に特別な関心をよせた。竹田は又九歳年下である皇太子裕仁のお気に入りの従兄弟だった。

皇族の男子はすべて軍事教育をうけていた。若い竹田宮は最初学習院へ通い、陸軍士官学校を一九三〇年に卒業し、騎兵隊の少尉に、そしてすぐ中尉になった。後に陸軍大学校で学び、一九三六年（昭・十一）八月には大尉となり一九四〇年（昭・十五）に少佐となった。一九四二年（昭・十七）には東南アジア方面軍司令官、寺内伯爵と裕仁との個人的な連絡役としてサイゴンへ送られた。（朝鮮総督として臺の略奪や市民の虐殺をした寺内大將の息子だ。）

他の皇子と同じく竹田も軍部エリート（最高幹部）の一員であり、その戦場での存在は天皇の最高指揮権の堅固な広告塔だ。

天皇の特命を受けている彼の任務は、アジア中でゴールデン・リリーの指揮をとる秩父宮の副司令官となっていた。

陸軍中尉に昇進した彼は作戦師団戦略部隊の將校、宮田中尉の偽名で登録された。公式にはまだサイゴンに在籍していたはずだが、マニラ以外の地域のゴールデンリリー作戦を担当するためフィリピンへ派遣された。

秩父殿下はマニラ全域の司令官であったが個人的にも財宝基地全体を監視していた。しかし彼は東京、シンガポール、ジャカルタへと出張で留守が多かった。

ベンはずべての皇子達が戦略会議を支配していた一九四三年の間に二度秩父を目撃している。ベンが言うには、秩父は常に他の皇子からチャコと呼ばれ、竹田はキムスと呼ばれていたそうだ。

竹田宮自身はサン・フェルナンドの高地を本拠にし、幾つかの大きな洞窟を建設していたが、最も重要なものはキャンプの隣に急いで作られた。彼は又、島全体の一七四箇所にあるそれぞれの皇族財宝の主任技師として指揮していた。つまり竹田はサンフェルナンドに常駐していたわけではないのだ。彼はフィリピン中を巡回し、シンガポール、バンコク、サイゴン、ジャカルタへ飛ぶ道中で略奪品を集め頻りに東京へ引き返していた。我々は彼が最低でも年に一度は日本にいたことを知っている。何故なら、彼の妻は、一九四〇、四二、四三、四四、四五、と子供を生んでいるのだから。キムスがサン・フェルナンドキャンプを歩き回る時は、いつも護衛が隣の護衛に皇子が来ることを大声で伝えた。誰もが広場にちらばり彼の目に入らないようにした。数世紀にわたって日本の庶民はいつもひれ伏し、頭を地面にこすりつけた。ベンはこれを目撃していたが、彼は日本人ではないのでこの掟を知らなかった。

何らかの理由から、キムスはベンガが彼の父エステバンに接する態度と同じことを自分にすることを喜んだ。

ある夜、足立大佐は屋敷の隣にある防空壕へ塩を取りにいかせた。ベンは塩を見つけることができず誤ってトンネルの中へまぎれこんでしまった。そこで彼は金の延べ棒でいっぱいになった木箱や壺をみつけた。塩ではないかと思ひ壺のひとつを開けてみると中には硬貨がつまっていた。ソ

プリン金貨、ドル銀貨や東南アジアの中で流通している硬貨など、ベンが見たこともないようなものばかりだった。彼は塩がないものかと別の壺を開けた。そしてもっとたくさんの硬貨をみつけた。一箇所にこれほどたくさん硬貨をみたことがなかったベンはびっくりして、壺に手をいれ硬貨をつかんだ。丁度そこへ日本兵がやって来て何をしているんだと問い詰めた。彼はベンをつまみだし、足立大佐はかれをキムスの前につれていった。

皇子は彼に問いただした。ベンはただ塩を探しに行っただけだと説明した。キムスは微笑んでベんに、行ってはならない所へは決して入らないよう、そして硬貨や財宝に触らないようやさしく注意した。

次の朝早くベンはベッドで一人寝ていて、たくさんの硬貨に埋もれながら目を覚ました。彼は動くのが恐ろしかった。彼は硬貨に触れると殺されるのだとおびえた。自分の名前が呼ばれると、ベンはベッドにへばりついたまま返事をした。キムスが笑いながらやってきて、ベんに硬貨を拾い集め袋に詰めるように言った。

そして牛や馬を乗せた荷車に水牛を結びつけ、硬貨と一緒に新しいミシンを積み込んだ。キムスは「君のお父さんに会いに行こう。」と言った。

彼はベンがトンネルの硬貨に夢中になったことを考えると少年の家族がとても貧乏であることを思い出した。

デュラオ地域へ行く途中、河沿いで何人かが深い立抗を掘り、別の者が立抗じゅうに立ててある陶器の壺から大量の硬貨を取り出している日本の兵士の一群を通過した。

キムスは彼らと言葉を交わし、何かの書類を調べ満足そうに荷車にもどった。デュラオへ進み続け、ベンは捕虜が木を切っているのを見た。そして有刺鉄線で囲まれた収容所へ行き着いた。裸同然で痩せ衰えた囚人が、バンでベンに読み書きを覚えてくれた「ディズニーの父さん」と呼ばれていた牧師だとわかった。

もうすぐ死ぬことがわかっていているベンは悲しく、そして申し訳なさいっぱいだった。

ベンの家に着くとキムスは足立大佐を通じて、ベンが従者としてとても良くやってくれているのでこのまま使い続けたいという事と、その代わりに父親にミシンと牛、馬、水牛、荷車、硬貨の大きい袋を提供すると話した。

最初ベンと両親は、奴隷として買われていくものだと思い、ベンは泣き出した。ベンを見ていた母親もあからさまに叫んだ。

足立は、本当にベンを雇いたいのだと説明した。キムスは日本の皇子であり、ベンがお気に入りだということ、彼を守るし、戦争が終われば皇子が両親のところへ連れて行くことを誓うということを彼らに説明した。

両親はベンの考えを聞いた。ベンは皇子の従者は皆親切だと言った。そして母に、心配はない、キムスは自分を弟のように扱ってくれると説明した。

高級将校である准将川畑、足立大佐、鍋木大佐、川淵大佐、ホンダ海軍大佐、高橋海軍大佐ら、すべてがベんに日本の言葉や表現を教えていた。(終戦までにはかなり流暢に話せるようになっていたし、簡単な文字ならば読めるようになっていた)

話がまとまりベンとキムスは荷車に戻り、サン・フェルナンドキャンプへ戻った。

明治大帝の孫が水牛の荷車で乗り回す姿は随分目立った、というのもキムスはいつもピシッとした白い制服を着ており、従者である陸、海軍の将校と違いがありすぎたからだ。上着の左胸の赤い円形プレートの上に記章を並べ、肩にはベンのとつては何かわからない肩章をつけていた。

しかし、赤い連帯記章は特別な意味があるもので、明るい赤の絹糸で刺繍がされていた。四角の回りをスカラップ模様で純金の縁取りがなされ、十

四花弁の菊の形は皇族の血流の紋章である。

ある時ベンは刺繍に強くブラシをかけすぎ金糸を引つ掛け、将校にひどく殴られた。この時殴られたことと、防空壕で硬貨に触れた時の叱責が、ベンが乱暴に扱われたすべてである。(半世紀後、表紙に黄金の菊の印のついた「ヤマト王朝」の英語版を見た時、ベンは「これはキムスが上着に付けていたやつだ。」とつぶやいた。)

キムスの前輪のフエンダーと同じ紋章のついた三角旗が将校の車にもはためき、そのためどの日本軍検問所でも衛兵達は皇子が接近していることを知ることができた。

ベンとキムスが二四歳と二五歳ぐらいだと思っていた。(実際は一九四三年で三四歳だ、しかし若くみえた)。彼はベンより背が高く、五フィート十インチ(一七五センチ)もあった。顔はとても平べったく、頭は剃っていた。彼には小さな癖があった。タバコを吸うとき、小指と薬指の間にタバコをはさみ、煙で輪を描くのだ。貴族としては彼のしぐさはものうげで、少しもあわてずゆっくりとしている。

いつも顔をぬぐうために白いハンカチを持ち歩いていた。彼のめがねはベンが今まで見たこともないようなもので、レンズが前へ飛び出るように蝶番がついていた。

たまに日本の歌「サクラ」を口ずさみ、「リリーマールレーン」を日本語でベんに教え、戦時中の世界の人気曲を歌って聞かせた。

キムスはとても優雅な英語を喋るのだが、それはベンしかそばにいない時だけだった。将校がまわりにいるときは日本語で話し、足立大佐がイロカノ語でベんに通訳した。

彼らのサン・フェルナンドの屋敷は厳重に警護されていた。高官が毎日、新聞をもってきた。財宝でいっぱい船を回収しやすい所へ沈めたと話しているのをベンは耳にした。キムスは机と大きな黒板を備えたテント部屋を持っており、そこでフィリピン中の財宝基地から報告にくる主任技師に指示をだしていた。ついにベンは、裕仁と皇族達だけのための一七五箇所の特別な財宝基地が作られていることを知った。それらを隠匿することがキムスの任務だったのだ。

どの隠匿施設にもそれぞれ主任技師、設計士、鉱山専門家、陶土の攪拌と塗りの専門家、罌の専門家、毒薬やシアン化合物を瓶に詰めて各設備にばらまく科学者などがいた。彼らがキムスに報告する。その進展をながめ整ったとみるや点検し、一覧表を作りに行き、そして封印するのだ。

ベンはキムスに付いてどこへでも行った。大きな南のミンダナオ島までも出かけた。

キムスは個人の従者に加えて、部下の後ろから重装備のトラックを連ねた三小隊の兵士がいた。これら普通の兵士は皇子と話すこともなく、直接顔を見る事すらできなかった。

車の中のキムスは手元にカバンを置き、中には設計図、目録(財宝一覧表)、地図、設計道具やコンパス、望遠鏡などの道具類が詰め込まれていた。

もう片側には軍刀があった。各施設に到着すると、キムスは綿密に調査された地図と主任技師によつて書かれた図面の最終点検に出かけ、その地域を歩き回つた。彼が十分に納得すると連合国捕虜や奴隷労働者を中に残したまま貯蔵庫を密封した。キムスはベンに、各施設において全ての奴隷労働者と捕虜達を中においたまま封印するの、又、後日、皇室のメンバーによつて回収されるまでこの場所の秘密を守れるように保証することもすべて天皇裕仁の命令なんだと語つた。

そして従うしかないと言つた。ベンは、人を残したままトンネルを塞ぐ時、キムスが頻繁に涙を流すのを見ていたのでその言葉を信じた。(ベンはこの件について我々に話しながらない。日本兵士がどうやって生き埋めにしたかを明らかにするのでさえ涙をいっばいいうかべていた。彼らには財宝を守ることにしかなかった。)、彼は生き埋めにされることを怖がっていた。

半世紀過ぎた今でも日本人が戻つてきて彼を罰しにくることを恐れていたのだ。)

ベンに言わせると、キムスは職務に忠実で細心の注意を払っていたということだ。ある時、貯蔵庫を封印する直前に労働者の一団から一人の中国人奴隷が逃亡した。その後日本軍が彼を捕えることができないとわかると、貯蔵庫から中のものを運び出すように命じた。そして金の延べ棒がつまつた二七〇の金属製の箱は持ち出され、何処かへ運び去られていった。また別のケースでは、キムスが施設の点検をすませると、その設計図と地図が不正確で、主任技師が自分のための財宝の確保するため悪意を持つて修正

を加えたと結論づけた。キムスはその場で首を切るように命じ、即座に実行された。

三年以上、ベンは彼に従つてルパング島のような島へ飛行機や船で付いてまわつた。それらの島には今までは異なる寸法の貯蔵庫があつた。ミンダナオ沿岸、北の果ての小さな島でベンは船を見たが、その船の甲板に大きな植木を生やし、生きた木に偽装していた。ずっしりとした箱が甲板に積み重ねられ、ドイツ兵が警護していた。キムスの将校がドイツの船だと語つた。ドイツ兵はすべての箱が降ろされ島の洞穴に運び込まれるのを監視していた。ベンには箱の中身が何であるか分からなかつたが、とても重いものであることは確かだつた。

戦争期間中、日本の貨物潜水艦はナチの潜水艦基地であるフランスのロリエントヘウランの購入代金として金の延べ棒を持ち込んでいた。これは日本が自前で原爆開発しようとした秘密計画の一部である。ドイツのユーボートと特殊地上工作員はインドネシアやフィリピンの中継地点にウランを運びそこで降ろした。そこからは日本の潜水艦が東京へ運んだ。鉛で保護された箱が降ろされ、待ち受けていた日本の潜水艦に搬入される取引をベンは目撃したはずだ。キムスは一七五箇所の皇室隠匿場所最終的な検品をした唯一の人間だが、初期段階では別の部隊も関わっていたとベンは言つた。彼は裕仁の弟、三笠宮に率いられていたと言つた。三笠宮が公式には南京の日本軍司令部に属していたと言われる同じ時期の三年間、ルソン島にいたとベンは主張した。そうなのだ、彼のルソンでの存在は確かに可能性があるのだ。(同じく竹田宮は公式にはハノイ配属となっていたが実際にルソンにいたのだから)

彼が言うには、他のチームは一九三七年(昭・十二)南京虐殺を命じた朝香宮の息子若い朝香孚彦(タカヒコ)に率いられていたそうだ。我々はベンがこれらの皇子の正式な名前を知っていることに驚かされた。

一九九〇年代に昔の三十年代に撮られた写真を使いブラインドテストを行った。彼は皇子達を特定した。あらかじめ混ぜてあつた皇子でない人物の

写真を特定できないだけだった。英国図書館の東洋コレクション管理者から提供してもらった貴重な写真を準備し、念のため身元が分かるものも取り外しておいた。ベンが日本の外部ではめつたに見られない時期の写真から、国外では知られていない皇子を特定したことは、彼が電話の掛け方すら習ったことがないことを知ったならばとてもすごいことじゃないか。

ベンは確信をもって言った。白い制服をきて赤い記章を付けた写真の男達がサン・フェルナンドにいたキムスに会いに来たと。

東久邇や朝香宮（年配のほう）のように随分年配者も含まれていた。彼らは視察旅行の途中、飛行機でルソンへやってきたのだった。兵士や将校は、そんな高位の皇子が訪ねてくると極度に緊張したという。

二つの目撃証言がある。ベンキムスとマニラの会合に行った時、秩父宮をずい分近い所で見かけた。すると秩父はハンカチに血を吐いた。それはベンにとつてとても印象深いものだった。

そしてもう一度、戦争が終わる月（八月）にバエンバンで再び秩父宮を見たのだ。ベンが直接目撃したとしても、秩父が結核だったということを知ることがある。何ヶ月もインタビューしているうちに、ベンが秩父の病気がだんだんひどくなり治療のため日本へ戻ったのだと言った。

そしてその間に三笠宮がサン・フェルナンドのキムスの所へ何回もやってきたのだそうだ。

ゴールデンリイに関わった日本人のまったく別の目撃者によると、皇子達の一団が巨大な施設を点検していた時にベンが三笠宮一行の中にいたという。ある日本人の情報ではベンが三笠宮の付き人であると推測されていた。

彼らが深い立抗や洞窟、地下道にいたとしてもベンがその中へ入る事など普通はなかった。入口では数十メートル離れた場所にいたし、もちろん入ることを禁じられていたので地面の下で何が行われているかを知る由もなかった。

ベンはタバコ、水、食料をすぐに取ってこれるように待機していたのだが

ら、見る事ができたのは、坑道や洞窟の地面に掘った穴の開閉装置が開いている時か、箱が坑道へ降ろされたりトンネルに運ばれるところぐらいだった。

中で起きている事はずいぶん後までベンには知らされなかった。ゴールデンリイの地下道の多くは丘や山へ真っ直ぐに突き進み、トンネルの床下を二〇メートルぐらいの深さで立抗を掘っていたのだが、これはとても重要なことだった。立抗はコンクリートの壁が作られ財宝でいっぱいになった。おそらく金の仏像を埋めたのだろう。（ベンが日本の神様だと思っていた。）コンクリートの壁は一〜二メートルの厚さで注入され、トンネルの床にみえるように偽装してあった。

宝探しの連中は足元にたまたま地下貯蔵庫があった時か、片側から隠れた坑道を完璧に取り去る以外に実を結ぶことはなかった。

そのひとつにバンタイ・ラケイと呼ばれるフィリピンの山があった。別のものはカパヤにあり、トンネル入口すぐ内側の立抗にとても大きな金の仏像が置いてあった。ベンが日本兵が大きな岩をトンネルの入口にころがし、残った開口部に小さな三つの岩を詰め込み、回りの石と同じ様に見える硬い陶器を混ぜたセメントですべてを塗りこむところを目撃した。

マニラの東、モンタルバンには日本軍の施設がたくさんあったが、その緩やかにうねった地域にたくさんトンネルが掘られていた。このトンネルを密封する前にベンが二週間にわたって、一日中財宝を積んだトラックが到着するのを見た。太平洋戦争の間、そこには発掘を妨害するための葉が茂った背の高い木が植えられていた。今日のモンタルバンは森林が伐採されて、そのほとんどが水田になっている。

財宝回収の最近の取り組みでは、千ポンド爆弾ばかりでなく日本軍が仕掛けたあつという間にトンネルを水没させてしまう巧妙な罠によって妨害されていた。

いつもではないけれど、キムスはバエンバンの南、アリタオにあるメニ・モンキーなどのトンネルや洞窟の中へベンを連れていく機会があった。メ

ニイー・モンキーは奇妙な所で、丘の中腹が一個十〜二十トンにもなるたくさんの巨石で覆われていた。これら直径数メートルにもなる巨石は特に毎年十一月にやってくる台風や洪水で丘の中腹で洗い流されてきた。

アリタオでは巨石群がぶどうの木や森林の傘におおわれ、赤毛ザルの群れが占領している岩場の間に天然の貯蔵庫をつくっていた。

キムスの技師達は猿を追っ払い、葉を燃やし、丘の横にある深さ四六メートルの大きな二つの空間を選んだ。そしてそれらをコンクリートで補強した。それぞれ約二〇フィートの巾と三〇フィートの長さがあり、空間にブラチナと金の延べ棒を綺麗に並べ、アクセサリーから取り外した原石で満たされた大きな五つの壺も追加された。

ベンは寶石が金の金具で留めてあるために没収された数千個の時計でいっぱいになった壺をみて吃驚してしまった。その壺を兵士達が空洞へ降ろした。二五〇キロの小さな金の仏像は注意深くコンクリート製の箱に入れられ、朝鮮の奴隷労働者達が帆布の帯を使って引きずりながら空洞へと引っ張っていった。

その施設での積み込みと在庫調べは全体で一週間かかった。次にベンは百台以上のトラックが財宝を積んでやって来たのを見た。それはキムスに最終的な検品をしてもらうためであった。ベンは皇子が色とりどりの宝石が詰まった最後の壺に手をつっこみ、指の間から滝のようにこぼれていくのをうつとりとみている姿に釘付けになってしまった。彼は兵士にそれを迷路の中へ運ぶように命じ、二人は道に迷わないようにおいてある丈夫な赤い紐に従って歩いていった。

その壺が他の壺の横に置かれると、空洞に繋がる通路はその地方の石とそっくりに見えるように彩色師によって混ぜ合わされた厚いコンクリートの壁でふさがれた。キムスとベンは兵士と技師の後ろについて巨石群の渓谷を抜け帰り道を行き丘の横の急流にでた。(我々はベンと一緒にメニイー・モンキーを訪れたがコブラの大群に囲まれて入ることができなかった。CDにはその写真がある。)

フィリピン最大の財宝貯蔵金庫施設のひとつは、キムスが拠点としたサン・フェルナンドキャンプのすぐそばにあった。そこは男達を三年間ずっと地下で働かせ、三つの天然の洞窟を拡張し、鉄筋コンクリートで壁を作り地下道でそれらを連結させようとしていた。サン・フェルナンドの地下施設は八番坑道と呼ばれ、規模はサッカー場に匹敵するといわれた。

九番坑道は別の日本軍キャンプの真下にあった。三番目は共同墓地施設とよばれ、バエンバン共同墓地のほとんど真下にあった。八番と九番は約一キロ離れていたが共同墓地とは一キロ半の距離があった。

この複合設備は終戦前の最後に在庫を調べ密閉されたひとつだ。

サン・フェルナンドの竹田宮が住んでいた屋敷のバルコニーから真東を見るとずんぐりとした一九四〇年代のブラジャーの姿にも見える二つの円錐形の山が聳え立っているのが望める。右側が四七七四フィートのセハール山、近くのもうひとつが五五九四フィートのパラウ山だ。イロカノ人はセハール山をナクンピンチャンと名付けたが日本軍はキサドと呼んだ。

毎朝、日が昇るとキムスは外へ出かけ、山に向かってお辞儀をしていた。

サン・フェルナンドから東に向けて二つの巨大なおっぱい山の裂け目に舗装していかない道路がのびていた。この道路の左側にパラウ山の山脚突き出しがあり、その下が八番坑道だ。(もともとの赤シリーズの地図が我々のCDに再現してある。)

この突き出し部の北わき腹から一キロ離れた所に他の陸軍キャンプがあり九番坑道のもうひとつの入口がある。

戦争の後半、一九四五年(昭・二〇)の冬から初春の頃、ここは山下將軍の司令部となり、その後で最終防衛戦を戦うためキアンガン地帯へ転戦していった。

ベンは山下の貯蔵庫の離れていた入口に関して耳にしたことはなかった。サン・フェルナンドのキムス司令部では八番坑道の痕跡は地面に穴があるだけで、そこから炭鉱夫を立抗へ降ろすための粗雑な骨組みのエレベーターがあっただけだ。このエレベーターがベンやキムスを二二〇フオート下

にある地下道の入口へ運んでくれる。

ある時地下に下りたベンはどっちの方向へ歩いていくのか聞くことができず。最初に袋でいっばいの応接間と呼ばれる円形の空洞にやってきた。ベンは袋の中身が何であるかを知らなかったし、聞くこともしなかった。その円形の部屋を囲んですべての方向へ放射状にタイヤホイールのように六本のトンネルがのびていた。彼らがそのトンネルのひとつに入ると、箱が内張りになるよう頭より高いところまで積み重なっているのがみえた。

次に三〇フィート下りるともっと大きな空間に到達した。床も天井もコンクリートが貼ってあり、ベンはまるで野球場のように大きいと思った。

そこが八番坑道の主要部分で、「貴重な部屋」と名付けられ、すでに金の延べ棒でいっぱいだった。

元々は天然の空洞だった所を日本軍のために二年を費やして拡張し強化したもので、今まで訪ねた施設のどこよりも多くの人とトラックを必要としたとベンは語った。そこでは延べ棒は積むというより、島のようになっており、それらの間に通路があった。

次の三番目の空洞に着くと、そこは鉄の扉で密閉されていた。そこにはベンは入ることが許されなかった。これが九番坑道か中央司令室だった。

ベんとキムスは別の長いトンネルを通り、最後に体育館並みの大きさの地下金庫に着いた。そこでは壁という壁に金の延べ棒が積み重ねてあった。

ベンは我々に言った。「私が見たのはとてもたくさん金塊だった。ブツダそっくりの少年像もあったよ。他にも二つの仏像と、たぶん二十五個ぐらいの小さい物もね。」すべてが純金で、前からそこにあつたものとは思えないとも言った。

一九四四年（昭・十九）の夏になると、連合軍によるフィリピン、或いはフォルモサへの侵攻がせまっていることが明らかになってきた。巨大なアメリカ艦隊がニューギニアのホランディアに集結していた。日本はルソン島ですら守ることが困難になってきた。黒田繁之大將はフィリピンで自らの指揮権を剥奪され、日本最高の戦闘将軍、山下奉文（ともゆき）と交代

した。山下は全精力をかけて、失ってしまったと本土が脅かされることになるグアムと沖繩への攻撃を妨害する作戦の一環としてフィリピン北方の防衛に当たることになった。

山下は奥が深く興味深い人間だ。表面的にはプロシア軍にあこがれ、日本軍をその様に作ってきたようにみせていた。

彼は大柄で頑丈な首、太い胴体、そして頭は剃っていた。その表情は乏しく残酷で鈍感にみせていた。現実には、日本の狂信的な軍国主義の危険な高まりに反対してきた穏健派だった。

一九三五年（昭・十）、最も危険な狂信者、永田鉄山が東京司令本部で相沢三郎陸軍中佐に刺殺された時、山下は玄關で刺客を止め、彼の手を取りその勇氣ある行動に感謝したほどだ。戦争の初期に山下はシンガポールにおいてあまりにも素晴らしい勝利を得たため、東条首相から恐れられ妬まれるほど大衆の英雄になったので、東条は彼を呼び戻し、戦争中のほとんどを満州に追い払っていた。しかしながら一九四四年の半ば、東条は失脚し山下を満州からルソンへ送る直接指令が下った。

軍事の天才が奇跡を起すように命じられたわけだ。彼がマニラに着いたのは一九四四年十月六日、もう形勢を変えるには遅すぎたであろう。

こうして山下は、最後の十ヶ月間だけゴールデン・リリーに関わることになるのだ。その頃皇子達やその側近は、マニラ北部の山へ金の延べ棒や他の財宝を大慌てで移送していた。山下は出来る限り長くそこを持ちこたえるように計画をたてた。

一九三〇年代早春の出来事（二・二六事件）が起きたとき、秩父は東京で山下の連隊に所属していたので、個人的に二人はとても親しかった。だからマニラのこの状況下で再会した時、二人の間には格別な連帯感が芽生えたのだ。ベンは彼らが挨拶するのを見たことがあるが、山下は秩父にお辞儀をしなかった唯一の日本人だったと言った。

そのかわり山下は秩父を久しぶりにあう弟のように出迎えたという。その年の十月、ベンはキムスとバエンバン北方のバガバグへ行つた。そこ

には日本軍の飛行場があり、彼らは十二人の乗客とともに双発の空軍機でマニラへ飛んだ。最初に行ったのはサンティアゴ要塞で、連合軍捕虜達がお化け金庫を古いスペイン時代の空気抗へー生懸命降ろしていた。次の朝は、サン・アウグスティン教会の六本指施設とマニラ大聖堂を訪れた。そしてそこで、金がつまつた金属の箱を財宝貯蔵庫へひとつづつ降ろし、次に金むくの仏像を収納するところをながめていた。

金むくの仏像はロープで巻かれ、片一方を馬で引つ張りながら降ろした。記録係が助けながら馬はゆっくりと像が立抗に下りていくよう、後ろ向きに動いた。その時山下將軍がやってきた。秩父に親しげに挨拶した時とは違い、キムスと山下はよそよそしく見えた。

その最後の十ヶ月、山下は小島カシイの運転で、西はバグイオと中央のバエンバン、そしてルソン北端アパリの間で十二箇所以上のゴールデン・リリー施設の進展状況を見て回った。

とにかく時間がなかった。一九四四年（昭・十九）十月、歴史上最大の海戦であったレイテ湾の戦闘で、日本は破滅的な損失を被った。マッカーサーは一九四一年（昭・十六）十二月の急襲で恥をかかされたあげく、次の数ヶ月でバターン部隊を置き去りにし、コレヒドールから不名誉な撤退をした経験から立ち直れないままであった。いまや彼は危険を冒すことはできなかった。レイテにおける彼の軍力は日本のほぼ十倍だった。

そこで勝利したマッカーサーは、ルソン侵攻の計画をたてた。山下はひとつの装甲師団と六つの歩兵部隊で二十七万五千人以上の兵士を確保していた。もつとも負傷兵や生存者、用役部隊も混じっていたが。

彼は山中において出来るだけ戦闘を引き伸ばすように耐えることしかできなかった。マニラを守ることは難しかった。彼は町から引き上げ、マニラを開放を宣言することを決めた。そうすれば無意味に破壊されることはないだろう。

不幸なことに、実際にはマニラは日本海軍の支配下にあったのだ。だから山下は一万六千名の海兵とそこにいる海軍部隊に対しての影響力を持って

はいなかった。

山下大將が全日本軍に郊外へ引き上げる命令をだしても、岩淵三次司令官は命令を無視した。岩淵はすべての港湾設備と海軍の倉庫の破壊を指示した。彼には彼の計画があった。コレキドール島に自分と海軍の大量略奪品を隠していたし、秩父宮が大量の財宝を隠したこともすべて知っていた。米軍が制空権を握ったため海への逃げ道はない。

岩淵は山中へ撤退できたのだが、逃げ惑うねずみになる代わりに、海兵にマニラ住民に対して乱暴するように仕向けた。マニラを無法地帯とみたマッカーサーは自分の誕生日である一九四五年（昭・二〇）一月二六日まで首都を落としたため、リングエン湾の浜辺から南方へ向かって大急ぎで軍を進めた。岩淵は一万六千名の兵士に玉砕を命じた。彼らは狼狽しながらマニラを墓場に変えるべく家から家へと銃撃を続け、通りにいた非戦闘員を剣で刺し南京以来の虐殺を女、子供に対して働いた。十万人のフィリピン人と千人のアメリカ人が殺され、都市の八〇パーセントの家が潰された。混乱の中、岩淵自身は城壁の坑道を通って抜け出し姿を消した。公式には死亡と伝えられているが確認はされていない。彼が潜水艦でルソンから抜け出し偽名を使って日本で天寿を全うしたという指摘もある。何故なら彼は死後裕仁によって中将に昇進しているからだ。

北方に向かって、山下の防衛ラインがバグイオ、バエンバン、ポントックの三角地帯に作られた。これらの地点に到達しようとする山峡や谷間の狭い道を通せざるを得ない、そこには兵士が塹壕を掘って待っている。

ベンには何が起きているのかわからなかった。ある日、キムスと部下は多くの飛行機が飛び回る中、ベンと共に小屋の中で待機していた。ベンはそれが日本機だと思っただが、足立大佐は米軍機だと言った。ベンは言った。「もう日本はダメなのですか？」足立や他の人は笑いながら、「米兵がやってくるんだよ、ベン。」

数日後、戦闘機が爆撃し機銃掃射していった。ベンはキムスらが祈りの儀式をしているのを見た。彼と竹田宮の結びつきが小さな出来事から汲み取

れる。キムスはベンに血の誓約をするようせまった。彼らは右手の小指の先を切り、滴り落ちる血で軍旗に血判をしあつた。(実際我々はベンの小指の先が欠落しているのを見ている)

まず、ベンは秩父宮のことを喋ることを禁じられた。第二には竹田宮の暗号名を漏らさないこと。「アメリカ兵にも中国人にもフィリピン人でも、日本人ですら言うな」。キムスはこれらの施設は皇族達だけのために保持されると語つた。ベンの将来のために金がいっぱい詰まつた二つの鉄製の箱を隠しておくとも言つた。そのためベンが忘れないよう、ベンの手に二つの刺青をいれ、その二つの箱にも同じ印をつけた。

次の日彼らはアリタオからバグイオへ向かう途中にピンカン橋へ行つた。川から数メートルの高い土手の上に立派なマンゴーの木がそびえ立つていた。水牛が引つ張つてきた二つの金属製の大きな箱が立抗の中へ埋められた。日本兵はその箱をこるがすために鉄製パイプを並べていたが、ひっぱるには五頭の水牛を必要とした。箱を立抗に入れた時、蓋が開けられ、キムスはベンを呼び寄せ、中に入っているものを見せた。そこには七五キロの金の延べ棒がびっしりと詰まつていた。キムスはベンに日本語で語りかけた。「これね、サービスだよ。たくさんたくさんさんのゴールドさ、ね？」

大まかに言うならば、「これは貴方にサービスとしてあげるよ。とてもたくさんさんの金だよ。OKか？」(ゴールドを日本語にすると金だ。しかし英語でゴールドを使う時に日本人の発音はゴールドだ。現地の人にはそのように聞こえるようだ。半世紀たつてキムスが言つたことをベンに書かせたが、彼の日本語の知識は限られていたので、「くれねーサービス。さよくれ、くれ、たくさんさんゴールドね」であつた。)

彼はキムスに箱には毒を振りまくらうと言つた。そして箱を閉じてしまつた。戦争が終わつて、ベンは自分でそこへきて掘り出した。穴を開けるとときベンは灯油を箱にまいてほこりを焼き尽くさねばならなかつた。そして蓋を開けるとときも箱の中のほこりを焼くためにもつと灯油をかける必要があつ

た。そうして彼は無事にゴールドを掘りだした。彼は全部の金塊の代わりに小さな塊をもちつた。というのは、あまりにも注目されすぎると売ることができないからだ。

キムスはベンにその金で大きな牧場を買い、村で見かけるような可愛い娘と結婚し、たくさん子供を作り助け合つて暮らすといいと話していた。

ベンは言葉がでなかつた。彼らが穴をいっぱいにするころ、ピンカン橋のもう片方から別のゴールドデン・リリー部隊がやつてきたのはびつくりした。そのリーダーはキムスと同じ赤いバツジをつけ、白い上着を着た秩父、そのひとだつた。キムスと秩父は互いに挨拶もしないし表情ひとつ変えなかつた。秩父はとてもほつそりとし、咳き込んでいた。ベンは彼のハンカチはまるで軍隊旗のように真っ赤だつたと言つた。

そして数日から数週間、彼らは残つた財宝を必死になつて埋めた。山下は米軍が進軍してきたため、バグイオを放棄し、バエンパンの勝負をかけた司令本部へ移動した。しかし、山下はキムスのキャンプがあるサン・フェルナンドにくることはなかつた。山下は九番抗の地下司令室に行くため、離れた所に専用入口をもつていた。彼と将校達はキアンガン地帯を放棄する前の数週間、多くの時間をこの地面の下で過ごした。

キアンガンではその合間に山下將軍と將校達が間近にせまる玉砕の戦いに使用するため、頑丈な基地として別の大きな洞窟が用意されていた。キアンガン渓谷は、丁度ケニアのソフトバレエと同じで自然に地面が隆起してできた地域で水も豊富で洞窟だらけだつた。山下が防御用に選んだ目的に完璧に適した天然の要塞だつた。

ベンはこれらの作業は戦闘不能な兵士や、非戦闘員の官僚に指揮された奴隷労働者によつて成し遂げられたのだと言つた。一九四五年(昭・二〇)五月五日、アメリカ軍の山中への進軍が素早かつたため山下は防衛の三つの地点の内二つをあきらめ、ボントックを棄てた。彼は部隊をバエンパンとベガバグの間に引き上げ、キアンガン渓谷に注ぐアシン川に沿つて展開した。この地帯は格別に険しいところなのだが、ベガバグは実際バエンパ

ンの北へたった二五マイルしかなく、ギアンガン溪谷の端はパエンバンの西にわずか五マイルなのだ。食料の供給は水牛の群れがあるので十分だ。又、山下の軍団はキアンガン溪谷中の早場米の収穫をすませていた。新たな収穫は九月にも準備ができるけれど、その頃には戦闘は終わっているだろう。その間に雨季が来る。アメリカ兵には耐えられない台風や洪水もやってくるだろう。

山下は空からの攻撃を妨げるために雨や台風を計算していた。一九四五年（昭・二〇）五月末、キムスとベンは秘密に北方へ行った。まず最初、バガバグへ行くところには三笠宮が待っていた。二人の皇子とベンはカガヤン溪谷を通りアパリに向かつて運転し、沿岸に沿って右へ回り小さな湾に入った。そこで高速警備船に乗るとカミグイン島の北側を横切り、そこに日本潜水艦が待機していた。キムスは艦に乗り、次の週の同じ時間に関しての打ち合わせを船長と行った。その間、三笠宮とベンは警備船に残っていた。三笠宮と二人だったのはその時だけだったとベンは言った。ベンは、キムスは自分がいなくてもベンに悪いことは起こらないとわかっていたと思つた。

六月に入り最初の四日間に山下の対戦車部隊はアリタオ南部で米軍七五戦車部隊と戦闘をおこない、その時から溪谷へ逃げ込む速度を上げる必要性が高まつてきた。

六月一日の夜、一七五箇所のゴールデン・リリーの主任技師は八番抗の地下会議室でお別れ会に呼ばれた。

残っていた財宝はすべて隠匿された。八番、九番坑道も、地下共同墓地も金の延べ棒でいっぱいだった。ベンによると、その夜彼はキムスと一緒にいて、技師達はたくさん酒を飲み乾杯と万歳を繰り返していた。

その時、地下共同墓地では二百名の奴隷労働者が集められ、日本兵が銃座の上で構えるマシンガンの監視下にあつたという。この施設を作つたキムスは主任技師達と一時間ほどつきあつたがベンを連れて設備全体の最後の巡回へ出かけた。彼らは連なる坑道を一時間以上歩き、積み重ねられた延

べ棒や財宝をながめていた。キムスは繰返しベンに言った。「注意しろよ電線をひっかけるとぶつ飛ぶぞ！」

電線は坑道全体のそこらじゅうでダイナマイトの束につながっていた。お別れ会にもどり、キムスは技師達に熱烈な演説を行い、天皇の名前で彼らの達成した偉業を称えた。

真つ赤になつた男達は「万歳」を叫び続けた。演説が終わつたときはすでに深夜だつた。山下大將がやってきた。

彼はキムスに坑道から出る時間だと言つた。ベンには中に残れと言つた。

「いや。」キムスは言つた。「私はベンを家に帰すことを約束しているんだ。」彼はベンを振り向き、「早く行くんだ。」と、工用エレベーターの坑道出口を指差した。

山下はあきれた顔をしたが、明治大帝の孫に文句を言う勇氣はなかつた。我々はなぜ山下はベンが中に残るのを望んだのかを聞いた。「それについてはおそらく誰も知らないだろう。」と答えた。

山下に従つて彼らはエレベーターへ歩き、地上へ上がった。言葉もかけずに山下は闇の中へ歩き去つた。キムスとベンが入口から離れた時、飛行機からの爆撃を思われる音が聞こえ地面に伏せた。巨大な爆発が地面をゆすつた。（次の日、日が昇ると道路の西側に十五フィートのため池ができていた。連結した坑道が崩落したのだろう）

我々はベンにその時、技術者や奴隷全員が地下に捕われていたことを知っていたかどうか聞いた。ベンは地面を見て、「僕は、キムスが山下の言う事を聞かなかつたことを幸いだと思つたよ。・・・おかげでここに残れた。」すこしたつてから付け加えて、「私は山下が恐かつた。」と言つた。

地面のゆれが止まつた時、キムスが泣いているのをベンは見た。ベンは「天皇の直接命令で彼はそうしたんだ。」と言つた。

海軍大佐本田を含む多くの将校も技術者と一緒に生き埋めにされた。ベンの家に彼らが着いた時、初めてキムスと足立大佐がベンと離れるときがき

たことを告げた。彼らはその夜にカミグイン島へ行き日本へ戻るために待機していた潜水艦に乗ったのだろう。

暗かったが、ベンはキムスが涙ぐんでいるのをみた。ベンも又ベソをかけた。「お前は父のベンハミーンの所へ行け。彼は片目しかないから農園ではお前の力がいる。ゲリラや米兵と一緒になるなよ。父さんの所にいて水田を手伝うんだぞ。」キムスは革カバンと刀をそこに置き、白い上着も脱いだ。ベンに上着と同様に軍刀を手渡した。そして歩きかけてから思い直し、地図がいつぱい詰まったカバンを渡しにもどってきた。おそらく潜水艦で日本にもどり、再びもどってくる可能性を考えたのだろう。

「私のためにとっておいてくれ。木の箱に入れ家の裏に埋めておくのだ。」そして呪文をと覚えて、「私との約束を忘れるなよ。この地図は誰にも、アメリカ人、中国人、日本人、フィリピン人、ゲリラの誰にも渡してはならない。私だけを待っているんだ。え〜いいいか、いいか。」（これを繰り返した。ベンはこのいいかを数えたら十回だった。）

「私が帰ってきたら君にやるから待っているよ。三〇年待ってくれ。もしも私がおどらなかつたら、地図を日本にもってこい。私が死んだら私の家族に渡すのだ。」キムスは百ヤードほど行き、又もどってきた。

そして再び誓いを繰り返した。「ベンハミーン、ゲリラや米兵と組むなよ。そうすると日本人はおまえを殺す。覚えていろよ。ゲリラはダメ。アメリカも中国もダメだ。私を待つのだ。」

今度こそ歩き去りもどらなかつた。ベンは長い間彼を見送り、軍刀とカバン、上着を家の中へ持ち込んだ。

夕暮れになって山下はアシン河を棄てキアングン溪谷へ入った。戦争終了まであと三ヶ月だった。竹田宮がベンに与えた軍刀は、鑄造した鋼の刃を持ち、隕石から得られた鉄から鍛えたもので、木と革の鞘がついていた。

日本の生きた宝（人間国宝）の一人が作り、それを収集していたキムスの祖父、明治大帝から送られたものだった。そんな大変な価値も知らないでベンはその年の十一月の収穫や、その後長年にわたり米の刈り取りに使っ

ていた。

彼は次の年の春、田んぼを耕しているときには、赤や金の菊の紋章が左胸に付いている白い上着を着ていた。父は皆の前で二度とそれを着てはいけないと警告した。そうでないと共謀者として殺されると。

上着と軍刀は長い間残してあった。何年たってもベンは誓いを守ったのだ。

訳者注 岩淵少将が山下將軍の命令に従いマニラを開放したとしたら、

フィリピン市民十万人、日本兵千数百人が死ぬ事はなかった。

先日、NHKのハイビジョンでマニラ市街戦の一ヶ月を特集していた。

サンチエゴ要塞が陥落したとき巻き添えにフィリピン市民一万人が死んだ。悪いのは海軍だが、マツカーサーの誕生日にこだわったため、あせつて攻撃をしたアメリカ軍のやり方も決してフィリピン人は許さないだろう。

NHKの番組の中では悲惨な砲撃を受けたサンチアゴの要塞の地下にたくさんのお時略奪財宝が隠されている事は語られなかった。そして、岩淵少尉がトンネルを通って何処かへ消えてしまった事も、そして彼が中将に昇進した事も語られなかった。

マツカーサーがその略奪財宝にどのように関わっていくかは次の章で説明されるであろう。